

梶尾高山寺とぶのをかうせんじの林泉は三雄の其一なり。同じく寺前に清瀧川のながれきよく、橋のほとり丹楓ならぬ所なし。寺説云、

上古住吉大神の靈蹟にして、建永元年十一月ことばの後鳥羽院詔を下して、明恵上人みやうゑを開祖〔又の名高弁かうべん〕とし、華嚴興隆の精舎とす。本尊は釈尊を安じ、鎮守は春日住吉の二神、開山堂には明恵上人の影を安じ、其傍に廟塔あり、春日神影向窟かすがのしんえうかうくつは開山堂の溪間にあり、文珠石は明恵上人静坐し給ふとき、文珠菩薩影向ありて光明真言の法七種の秘印持戒清浄の印を授与し給ふ所なり、今に岩面に文珠の種字■顕然たり、仏足石は明恵上人みやうゑの作り給ひしが、今は谷底に埋れて在跡さだかならず。当山の高嶺こだいさんを五台山となづく、練若台は西の峯にあり、建保の頃今のこ、に艸菴を結びて坐禅し給ふ遺跡なり。〔当山七所の靈跡の第一なり〕石水院いすゐいんの跡は今の春日住吉の社地をいふ。〔第二の名跡なり〕花宮殿かぐうでん、羅坡坊らかはは春日山の中にあり。〔是遺跡の第三第四とす〕三加禅さんかぜんも其側にあり。〔これを第五とす〕禅河院ぜんがえんは開山堂の西谷にありて、此名義は西天伽耶城菩提樹さいてんかやじやうぼだいじゆの前に流る、尼連禅河にれんぜんかの地勢に相似たるをもつて号るなり。〔第六とす〕定心石といふは清滝川の上にあり。〔第七の遺跡とす〕

著聞集 高弁上人かうべん（明恵）おさなくて北院御室きたのあんおむろに候はれけり。文学坊まいりてその小童を見て此児はたゞ人にあら

ずと相して、まげて此児文学に給はりて弟子にし侍らんと申て取てけり。法師になりて高雄たかをに住せけるに、かくもんに心を入れてあからさまにも他事をせざりけり。文学坊高雄を作るとて番匠をせさせてひしめきける事、高弁上人かうべんうるさき事に思ひて、聖教のもたる、限りいだき持て山の奥へ入て、人も通ぬ所にて只老人見られけり。昼つかた

番匠が食物をなみすへたる時、山の中より走りくだりて其飯七八人が分をやすくととりくいて、又あらぬ聖教をもちて帰入ぬ。扱山の中に二三日も居て出られず、かくする事二三日に一度必有けり。文学坊此事を聞てたゞ人のふるまひに非ず、権者の所為なりとぞいひける。此上人暗夜に聖教を見給ひける、大神基賢が子に光音といふ僧、かの上人の弟子にて侍けり、年頃給仕して侍りけるがかたりけるは、さしもくらき夜も火もともさずして聖教を見給ふとて、弟子どもにしかぐの所に文取て給へといはれければ、くらまぎれにさぐりて来るを見て、此ふみにはあらず、しかぐのふみなど宜ひける、ふしぎなりし事なり。かた夕暮に光音をよびて、山寺のたゞ今程はよに心のすむものなり、いざさせ給へ月見にとて房を出て、清瀧川のはたをかみへ廿余町ばかり山をわけ入て、大なる石有。それにのぼりて、此いしはいかにもやうある石なり、伽藍などのたちける礎にもやありけん、此石などやらんなつかしきなりとて、ふくるまでこゝろをすましてさまぐの物語しつつ坐せられけり。寒くおはすらんとて、その石の上にいづくに有べしとも覚ぬに、円座一枚を取出して光音にしかせられける、ふしぎにめづらかなる事どもなり。彼石をば定心石とぞ名付られける。もろこしの悟真寺の石に模せられけるにこそ。又縄床樹といふ松有、その松坐禅にたよりありけり、正月の頃松のもとに居て観念せられけるに、あられのふりければ、

新 勅 岩のうへ松のこかげにすみ染の袖のあられやかけしその玉 高 弁 上 人

〔此外明恵上人釈尊の靈跡を拝奉んとて、弟子十余人を相具して天竺へわたり侍らんと思はれける頃。南都春日大明神

にいとま申さんとて、かの御やしろへ参られけるに、鹿六十頭膝をおりて地にふしてうやまひける事など見えたり、こゝに略す」

梅尾茶とがのをちやのはじまり濫觴、深瀬ふかせ三本木さんほんぎ〔梅尾高橋とぶのをたかはしの北の方に古跡あり、相伝ふ、むかし建仁寺けんになんじ榮西えいさい禪師ぜんじ入宋して帰朝の時、茶実三粒を将来し、漢からの小柿といふ茶器に貯て明恵上人に贈り給ふ。即ち此地字を深瀬ふかせ三本木といふ所に植られ、天下茶園の初とす。其後宇治里にうつし植る〕

菊のうたとて

春雨抄 曇るなり雨ふらぬまにつみてをけとがのお山の春の若草

明恵上人

海人藻芥云 茶は上古より我朝にあり、挽茶節会とて内裏に於て公事儀式を行はる。然るに葉上せふじやう僧正入唐の時重て種を渡さる、梅尾とがのを明恵上人これを翫給ふ、されば梅尾宇治とがのをうちの名産なり。

明恵伝記云 建仁寺長老より茶を進ぜられけり。医師に是を問給ふに、茶は遣り困ヲシテ消ニ食ヲ氣ニ快ニからしむる徳あり、然れども本朝いまだ普あまねからずと申ければ、其实を三粒植初られけり。誠に眠を覚し氣を晴す徳あれば、衆僧にも服せしめられき。

寺記云 深瀬ふかせの園そのは高山寺かうぜんじの橋より東北の地をいふ、明恵みやうゑ初て茗実三粒を植給ひし地なり。因レ茲梅尾茶を深瀬三本木茶と称す。此蘭今にあり。其茶実三粒入て榮西禪師より進ぜられし茶入を、漢小柿といふ、当山第一の器なり。又云、

城州菟道郡蹄茗園は、明恵上人の園なりとあり。其所は菟道郡五箇莊の内なり。梶尾山は寒冷の地なり、温陽の地を求め茶樹を移し植んとて、上人馬に騎て巡見し、五箇庄の内大和田に一つの園地を得て、梶尾より茶樹を分移し植給ふ、其園を駒蹄影こまあしかげといふ。歌に、

梶山とがやまの尾上をのへの茶の木分植て跡ぞ生べし駒の蹄影あしかげ

高 弁 上 人

其園はむかし菟道殿うぢの茶園なり、平治の乱に荒蕪すといふ。其後茶園を久世郡宇治里に移すとあり。上人茶を植初給ひしゆへ、古来より今に、宇治より毎年新茶を上人の影前へ献ぜらるゝとぞ。

高山寺知事記録云 禁裏御所献茶梶尾諸房目録〔地藏院壹袋、田中坊壹袋、関伽井坊三袋、東坊三袋、中之坊二袋、

已上十袋〕

大樹公献茶梶尾諸房目録〔地藏院一袋、田中坊三袋、東坊三袋、中之坊二袋、入江坊一袋、已上十袋。寺奉行飯尾大和守江十袋、飯尾左近将監江式袋〕

高辨上人書翰云 〔明恵上人初の名成辨其後高辨と改らる、此書翰今に高山寺にあり〕

鶴禅房授与師範事奉畏候又兼而仰候茶実未熟候之間令熟候分聊進之候恐恐

即 時

高 辨

高雄上人御房（文覚）

古記云 明恵上人栄西禪師より乞得給ふ茶実を梅尾山に植て、其茶を製作して時の帝へ献ぜらるる。岩上茶より茶味勝れしを叡感有て、都茗と命^ス之^ヲ。それより岩上茶を鄙茗と云、梅尾茶を本茗といひなせり。

畠山義就書翰云 就御内書之義^ニ卷数則目出度候。乍併連日祈念之驗祝^{しるし}著候。猶祈禱^{たのみ}憑入候。仍而茶到来云^ニ名物^ト一賞翫^{くわん}無^レ極^リ候。事々期^ニ来信^一候。恐々。

卯月十一日

義就判

田中坊

〔此田中坊は今の善財院なり、此書翰高山寺の宝庫にあり〕

龍巖集云 梅尾自^レ古産^ニ佳茶^一而未^タ知^ラ有^ルコトヲ 名^ニ昔山^一。及^テ閱^{スル}下 清拙和尚集中同^ニ夢窓国師^ト遊^フ梅尾^ニ之詩^ヲ上。始識^テ古呼^ヘ為^ルコトヲ 茶山^一。其詩云。

幾重峰^シ転又谿^ル廻。行^テ到^ニ茶山^ニ睡眼開。

仏殿^ノ東房小棲^ノ上。夢窓清拙^ス記同^一来^ヲ。

西斎詩話云 寿上人^ル自^ニ日東^一。其国所^{スル}産^ニ以^ニ梅山茶^一。見^レ恵賦^{シテ}詩^ヲ謝。幸得^ニ梅山信^一。初嘗^{テム}日本茶。

尺素往来云 梅尾者此間雖^{トモ}衰微之体候^{ニト}。名下不^レ虚^シ。諺不^レ可^レ忘^ニ思召^ニ候。朝日并深瀬之走摘止闕伽井逆淵外畑小畠

等。云々。

遊覽往來云　茶深瀬、小島、天狗島、一瀬、外畑、岩伝、門不見橋返、鐘樓花、禪河院、云々。

異制庭訓云　吾朝茶之窟宅以二梅尾為本也。開山禪師依二習禪勤行之障睡魔為二強敵。為二彼退治降伏。植茶而為二精

進幢。伝二賢首之大教。窮二秘密之奧談。故經云。以二因分可說。但為二利益。說二之真詮。為二茶之末。以二果分不可

說。我本無有言之秘宣。為二茶之本也。辺土洛陽之名山名所如二雲如霧。各誇二其家之春。雖二嘲二他山之景。皆是

為二城州梅尾和州清滝之末流也。又云。我朝之茗山者以二梅尾為二第一也。仁和寺。醍醐。宇治。葉室般若寺。神

尾寺。是為二補佐。此外大和宝尾。伊賀八島。伊勢河居。駿河清見。武藏河越茶皆是天下所指言也。

茶壺能狂言云　扱も我主との中国一の法師にて、鄙の茶をたてぬ事なし、いちそくの寄合に本の茶をたてんと、五十

くわんのくりをもち、おほくのあしをつかうて、兵庫の津にも着たり。兵庫をたつて二日に梅尾にも着しかば、峯

の坊谷の坊、特に名蘭しけるは関伽井の坊の穂先を十斤許買取、此壺にうち入、うしろにせおふて国をさいて下る。

(下略。)

〔近年宝曆中梅尾茗園記抄を金龍道人著す、これを略してこゝに出すのみ〕